

—研究ノート—

ドレイファスの技能獲得段階

服部俊子

滋賀医科大学医学部附属病院看護臨床教育センター

要旨

ドレイファスは、人間の知能を人工知能によって再現できるとするコンピューター科学者の主張を、徹底的に批判する哲学者である。彼は自身のハイデガー解釈から、人工知能では再現できない人間存在の仕方を示そうとする。その存在の仕方を初心者からエキスパートまでの段階で示したのが技能獲得段階であり、専門職従事者の職場教育で用いられることが多いモデルである。本稿の主題はこのモデルの特徴を明らかにすることである。それは、ドレイファスが、ハイデガーが重視した人間存在の時間性/歴史性に焦点をあてないハイデガー解釈をしたことにより、エキスパートへと変化する人間存在の仕方が描きにくいモデルであることを指摘することである。

キーワード：ドレイファス, 技能習得獲得段階, ハイデガー, 配視的対処, 熟慮的対処

はじめに

専門職従事者はそれぞれに求められている専門的スキルをどうすれば獲得できるのだろうか。専門的知識を覚えればスキルが獲得できる、ということであればいいのだが、そうではない以上、これはおそらく専門職従事者にとっての共通のテーマだろう。臨床教育や大学教育に携わる私にとって、担当する科目や研修で対象者が専門的スキルをどうすれば(どのような教育的アプローチをすれば)獲得できるのか、対象者が専門的スキルを獲得できるような教育的アプローチができるスキルを自身はどうすれば獲得できるのか、これらは重大なテーマである。

この問いに答える試みの一つに、ドレイファスが示した技能獲得段階がある。ドレイファスは、人間の知能を「人工知能」によって再現できるとするコンピューター科学者の主張を、西洋哲学の表象主義¹⁾の現れとしてとらえ、ハイデガー哲学を反表象主義的着想として解釈する哲学者である。彼は「ハイデガーの新しいアプローチの根底にあるのは、日常的事象に対処していく『心抜き』技能現象学」

(Dreyfus 2000,3)であり、人工知能では再現できない人間存在の仕方を示したものとする。「ハイデガーの反論は、自足した個別的主観がその心的内容に

よって世界へと向けられているというような志向性よりも、もっと基礎的な志向性の形式が存在」(3)するのであり、その形式の存在は「われわれが知識化できるようなものではなく—すなわち世界に対応する心中の表象ではなく—、われわれが端的にそれであるものとしてこうした存在了解の本性を問うこと」(3)で明らかになるとして、ドレイファスは独自のハイデガー解釈から技能獲得段階を示した。

本稿は、ドレイファスの技能獲得段階の特徴を明らかにするために、技能獲得段階を特にエキスパート—人工知能では再現できない知能をもつ存在の仕方に焦点をあて、ハイデガーが示した基礎的な形式の存在の仕方に関連させて紹介する。そして、ハイデガーの時間性/歴史性に焦点をあてないドレイファスの解釈が、エキスパートを生得的な存在の仕方のようにとらえてはいないか、またそれにより、技能獲得段階がエキスパートへと変化する人間存在のプロセスをとらえられないと思える点を指摘する。

技能獲得段階²⁾

第一段階<初心者>—技能獲得のための教育は、初心者が獲得すべきスキルなしでも認識できるように、コンテキストを欠いた特性へと作業環境を分解

してやることから始まる(19)。自動車の運転を習う生徒は「スピードメーターが時速10マイルを指したときにはギアチェンジせよ」というルールを教えられる。自分の文化のなかで倫理的に行為する仕方を学びつつある子どもは、「決して嘘をつくな」というルールを教えられる(19)。

第二段階<中級者>—初心者、現実の状況に対処する経験を積むにつれて、状況についてのさらに意味のある側面を表わす、明瞭な例に気づくようになる、あるいは教師がそのことを教える。例を十分な数だけ経験すると、生徒はそうした例を認識するようにできるのである。このような、状況についての新しい意味のある側面を処理していくための、指令となる原則が存在しうることになる。その原則は、「エンジン音が空回りしているような音を出しているときにはハイギアにし、エンジンが苦しそうな音をだしているときには、ローギアにせよ」「他人の気を悪くさせないということが問題であるとき以外は、決して嘘をつくな」などである(19-20)。

第三段階<上級者>—認識すべき関連する可能的要因がどんどん数を増やしていつて手に負えなくなってくる。この時点では、どんな個別状況をとったときでもないが重要なかを教えてくれる理解力がはたらかないので、技能の遂行は、神経をいららさせるものになり、消耗させるものになる。技能を学ぶ者は、その技能に熟達することなどそもそもできるのだろうか、と当然の疑問を抱くことになる。・・・状況のどの要素が重要だと見なされねばならないか、またどの要素を無視してよいのかを決定するような計画を考案すること、あるいはそうした決定をなす視点を選択することを学んでいく。・・・高速道路の出口のカーブを降りようとする上級のドライバーは、ギアを変えるかどうかよりは自動車のスピードに対して、注意を払うことを学んでいる。このドライバーは、スピードや路面の状態、路面の傾斜角度などを考慮に入れてしまった後で、自動車が早く走りすぎているかどうかについて意思決定する。さらに彼は、アクセルをゆるめるべきか、アクセルから足をまったく離してしまうべきか、ブレーキを踏むべきか、そしてこれらの行為のうちの一つ

を正確にはいつ行うべきか、について意思決定しなければならない。・・・真実を語るべき状況がある一方で、嘘の必要な状況もあるということ、若者は学んでいく。これは気をくじく教訓ではあるが、若者は、目下の状況が信頼を築くべき状況なのか、相手をサポートすべき状況なのか、他人をその当人の利益のために操作すべき状況なのか、残忍な敵対者を害すべき状況なのか、等々を決定することを学ぶ。・・・現実には、名前をつけられたり正確に定義されるより、もっと多くの状況があるのだから、状況のタイプの一覧表を学習者に用意してくれる人などありえないし、それぞれの状況で何をすべきかを意思決定するのに使える計画や視点が、どんなものであるべきかを教えてくれる人もありえない。したがって上級者は、自ら何らかの視点を選択しなければならず、その際、その視点が最終的に適切かどうかには確信が持てないでいる(20-22)。

第四段階<エキスパート>—同一の視点から見ると、場合でもそれぞれ異なった戦略的な意思決定を要求している、さまざまな状況に対して十分な経験を積むと、上級者はしだいに、状況のクラスを下位クラスへと分解していくようである。この下位クラスのそれぞれが、同一の意思決定、一つの行為、あるいは一つの戦略を共有している。このような下位クラスへの分解によって、いちいちの状況への即座の応答が可能になる。スピードをどうするかが問題なとき、エキスパートのドライバーは、普通特に注意を払うことをせず、自分の技能に身を任せているという感じを持つだけではない。彼は計算したりほかの選択肢との比較をすることをせずに、適切な行為をいかに遂行すべきかを知っている。高速道路の出口で、彼はただ、アクセルから足を離すかブレーキを踏むだけである。なされねばならないことは、端的になされるのだ。・・・たいていの子供たちは、倫理に関するエキスパートに育っていく。ルールや原則に訴えることをしないで、状況に応じて真実を言ったり自発的に嘘をついたりすることを、学んでいるのである(22-23)。

ドレイファスの描く技能獲得段階は、初心者が文脈に非依存的な知識を機械的に適用するのに対して、

エキスパートになれば変化する状況に対して直観で判断し、意思決定や問題解決などをせず、即応的な行動をする。ドレイファスは、このようなエキスパートの存在の仕方は人工知能では再現できないと主張し、また、人工知能が再現できるのは第三段階までで、表象主義的な教育で養成できる技能も第三段階までであるとした (Dreyfus 2002, 51-52)。エキスパートが獲得する技能的な知は表象主義的な教育では獲得できない人間独自の知であり、反表象主義的な観点からの分析が必要なものである。ドレイファスは、表象主義が密かに前提としながら注目することがなかった「われわれが社会化されてそのなかへと巻き込まれていながらしかもわれわれの心中でそれが表象されることがないような、日常的ふるまいという背景」(Dreyfus 2000, 3)に重要性を認め、われわれ人間がたいいてい、その日常生活において理解してしまっている存在についての理解—日常的な存在理解—を分析したハイデガー哲学を反表象主義的着想として解釈し、技能獲得段階に関連させていく。ここでまず、ハイデガーの「日常的なふるまい」の分析を簡単に見ておこう。

日常的なふるまい

朝、起床してドアを開け寝室を出て、洗面所に向かい水を出して顔を洗う。われわれの日常的なふるまいは、たくさんの道具を使いながら行動しているものである。しかし、いつでもわれわれは明示的な命題を心に浮かべながら「部屋を出る為にドアを開ける」「顔を洗うために水の栓を開ける」などの、目的や計画に導かれて行動しているわけではない。われわれがスムーズに行動するのはわれわれが、「～のため for the sake of [which]」に存在している道具連関(ネットワーク)³⁾をこちらが見抜く「配視」に導かれ道具との距離を測りながら行動するという、すでに「道具の織りなす配置に対応する仕方で技能化されている」(門脇 2010, 119)からである。こうした配視を可能にしているのが、われわれの存在の仕方である。「～のために」存在する道具連関の中で道具や道具を使う者の位置を見抜き、そこでの行動やその行動をする者が状況の中で透明性であるには

配視に導かれなければならない。

一方、道具に目を向けると、道具はそもそも目立たないときに本領を発揮する存在の仕方であり、また、ほかの道具やそれが使われる目的などを背景としてのみ意味をもつ「全体論的な性格」をもつ。これをハイデガーは「道具的存在性」(Heidegger 1980, 158)と名付け、理論的ふるまいの対象となるような事物の存在性格を「事物的存在性」(159)として、事物的存在性を道具的存在性の欠如的派生態ととらえた。ドレイファスは、道具的存在性では道具も道具を使用する者も透明な存在であるが、道具の「機能の不調」や「一時的故障」「全体的故障」となると、われわれに理論的なふるまいを要求する存在者になると言う。機能の不調では、透明な存在だったものが目立ってくるものの、素早い配視的対処は可能であるが、不調が長引き一時的故障や全体的故障になれば、状況を把握すべく「熟慮」の状況が生じることになる。ドレイファスはこの熟慮を、道具が事物的存在性となるレベルで事物を把握する理論的な(認識作用に基づく)ふるまいととらえる。

なぜ、道具の故障が起きたのか、どうすれば故障に対応できるか、道具そのものを文脈から引き離し、道具の原理や機能などを分析し、道具の故障に対処するのが熟慮的対処であり、一方、習慣的行為のように、道具連関の中の存在のそれぞれの配置に対応する仕方で対処するのが配視的対処である。熟慮的対処は認識作用に基づくので意識化されやすいが⁴⁾、配視的対処は、道具連関の中に配置されている道具もそれを用いることも用いる者もすべて透明なので、意図や行動を明確にすることが困難である。

ハイデガーが、これまでの表象主義的な哲学が道具的存在を副次的なものとして扱っていた存在のカテゴリーの「中心と周縁の転換」(門脇 2010, 59)を行なったとされる。そのハイデガー哲学を、ドレイファスは反表象主義的着想として独自の解釈を展開し、技能習得段階に関連させていく。

ハイデガー解釈による技能獲得段階の問題

新しい職場の空間にはじめて足を踏み入れると、「～のために」存在しているかもわからない道具が

事物的存在性として存在していることに気付く。だからこそ、このような存在の仕方である初心者への教育は、道具に対処する理論的ふるまいの学習から入らなければならない。ドレイファスによれば、初心者に行う職場教育を「コンテキストを欠いた特性へと作業環境を分解してやること」から始めるのは、日常的ふるまいに必要な技能的な知をつけるために、道具連関を分解させ、非文脈的なものとしての道具の一つ一つの原則や使用ルールの説明が必要だからである。初心者、上級者、中級者は、状況に対して、原則やルールを適応させる方法で対処するのであり、「いかになすかを知ること **knowing-how**」を「事を知ること **knowing-that**」で対処する技能的な知を獲得するが、エキスパートになれば「いかになすかを知ること」に即応できる技能的な知が獲得される。その知は、原則やルールを適応させるのではなく、膨大な原則やルールを下位クラスにした直観的に適切な、専門的で技能的ふるまいとしての配視的対処を可能にする。ドレイファスは、エキスパート特有の存在の仕方を、『いかになすかを知ること』はすべて実際には『事を知ること』なのであって、ユルゲン・ハーバマスによれば・・・『目標に向けられた行為においては、・・・ある暗黙裡の知が表現されている。このいかになすかを知ることとは、原理的に事を知ることへと変形しうる』のである」(Dreyfus 2000, 97)と言った「技能が知識から再構成される」(97)とする表象主義的な哲学を徹底的に批判し、そのような技能ではない「配視的対処においてあらわれる技能」(98)を獲得したものととしてとらえるのである。

それではいったい、エキスパートの配視的対処は、どうすれば可能になるのだろうか。または、そもそも、道具連関が形成される空間のそのときの状況と、状況内にあるわれわれとのカップリングにおいて生じる熟慮的対処を超えたものとしての配視的対処は、どのような構造をした行為なのだろうか。

ドレイファスは、エキスパートのバスケットボール選手が、試合の最中にボールをパスするという目的にかなった複雑な行為の経験を記述すると「コートで私がしている多くのことは、ただただ状況に対

する反応であるにすぎない。・・・私は、ボールをパスしても、ちょっと時間がたたないと、ボールをパスしたことに気づかないことがたびたびある」となるという例示をし、エキスパートの対処を熟慮的対処ではない配視的対処とする(105)。「人間は多岐にわたる状況において、行為の狙っている達成内容を特定する表象状態をつねに伴わなくとも、目的にかなった一定の組織化された仕方にかかわっている」(105)ので行為も行為もすべて透明性であると主張し、「いかになすかを知ること」による配視的対処も、エキスパートの段階の技能的な知により可能になる非熟慮的な対処と見なすのである。

しかし、どうすればそのような知が獲得できるのか、そのエキスパートの配視的対処はどのような構造の行為なのかについて、ドレイファスは明示しているとはいえない。なぜなら、ドレイファスのハイデガー解釈が「理論的なふるまいの解釈、また道具的存在性と事物的存在性の優位性の解釈などの部分は、ドレイファスがかなり事物を対象化する作用である表象主義を批判する立場を強調するあまりか、議論がなりたっていない」(門脇 2000, 354)のであり、また、ハイデガーが重点をおいて考察した時間性/歴史性をあえて重視しない「ハイデガーの指示からすれば大きな逸脱」(門脇 2000, 356)をしたものだからである。人間独自の技能的な知によるエキスパートの対処はどのような構造のものか、その熟慮的対処を超えた配視的対処はどうすれば可能になるのかの明示が困難なのは「解釈上の問題点が、行為論として見たときの(「透明性テーゼ」)の問題点になる」(石原 2010, 26)からであろう。ハイデガーの時間性/歴史性を重視しない解釈は表象主義批判の戦略的なものだろうが、技能獲得段階における人間存在を、存在の仕方が変化する可能性を閉じた固定的な存在の仕方にとらえたように見える。それゆえ、ドレイファスの技能獲得段階は、エキスパートの存在の仕方を生得的なものとし、エキスパートになるために意図的に努力して存在の仕方を変えようとすることや、存在の仕方が変化していけるような教育的アプローチを考えることなどの意図的行為を想定しにくい、技能獲得プロセスを描きにくいも

のになってしまったのではないか。

しかし、ドレイファスは、あくまでもハイデガーが、熟慮的対処や配視的対処という日常的な活動を道具や他者、自己の関係を主題的に意識することがない非熟慮的対処と見なしていると主張し、自身の解釈がハイデガー哲学の正当な解釈だと主張する(63-65)。専門職従事者が専門的技能的な知を獲得しようと努力するのは、より上の段階の存在の仕方に变化する可能性があるからこそだが、この解釈からは、エキスパートの存在の仕方を目指して变化する人間像が見えてこない。人間存在の仕方が变化する契機が、技能獲得段階をプロセスとしてとらえる可能性を開くだろう。

エキスパートへの道

ハイデガーによれば、存在の仕方を变化する契機は、「先駆的決意性」によりわれわれが「世人」という日常的なわれわれの存在の仕方を脱すること、つまり、時間性／歴史性をもつ固有の自己になることである⁵⁾。また、日常的なわれわれのふるまいは、原則やルールを適用させる公共的規範を用いた方法の対処であるが、いまだ「行為」ではない。われわれは、先駆的決意により世」という日常的な存在の仕方を脱し、時間性／歴史性をもつ固有の自己になることで、行為の遂行が可能になる。いいかえれば先駆的決意性により「投企」する存在の仕方に变化するのである。日常的なふるまいでは対処できなくなるという不安(最も不安を呼び起こすのが、誰にも訪れる代替不可能な死である)が、死への先駆という契機を呼び起こす。われわれは先駆的決意性により「被投性」の無力さに向き合い、そして今までは違う存在の仕方をめがけて投企する行為を遂行するようになる。つまり、先駆的決意性によりわれわれは、日常的なふるまいとしての、手頃な規則と公共的規範を満たしているかどうかだけを知っているものとは異なるあらたな方法を、到来する可能性にめがけ創造するような行為の遂行が可能になるのである。行為の帰結に伴う責任に応答し、複雑な状況でも瞬時に創造的な方法で行う対処が、固有の自己として遂行できる行為なのである。われわれはこ

のような、つねに未来の可能性にめがけて行為を遂行する人を、エキスパートと見ているのではないだろうか。

しかし、ドレイファスのハイデガー解釈では、われわれは日常的なあり方の世」にとどまるものとして描かれるので、ハイデガーがとらえる世人としての対応の仕方である手頃な規則と公共的規範を満たしているかどうかだけを知っている活動がすべての対処方法となる。それでは、専門職従事者が社会における役割や価値を無批判で受け入れ踏襲するような行為をする存在の仕方もエキスパートと見なされてしまうのではないか。これを看護領域にスライドさせて考察する。

日常的な存在の仕方の看護師は、「看護師であること」という生き方が認められている社会で看護師にしかるべき行動様式を背負わされており、その行動様式に基づいた行動の一致を通じて人々に共有される。そこにおいては、看護における規範や規則に則った行動を看護師がとることが「看護師であること」とされ、行動様式に基づかないのは看護師としての存在の仕方を逸脱すると見なされよう。もし、この日常的な存在の仕方であるままなら、あらたな行動様式を生み出そうとする、あるいは、あらたな存在の仕方の看護師を目指し技能的な知を獲得しようとするような、投企する人間存在の仕方は見えてこない。ドレイファスのハイデガー解釈に依拠してエキスパートの看護師をとらえるなら、今後のあらたな看護の(あり方の)可能性にむかって投企するような存在ではなく、日常的なふるまいとしての配視的対処をする存在の仕方である。われわれが思うエキスパートの看護師はそのような存在の仕方ではなく、複雑な状況の中で何をすべきか、あらたな方法を創造しながら状況に即応的な行動をする者ではないだろうか。ドレイファスのハイデガー解釈ではエキスパートが生得的な存在の仕方と見なされ、専門的な技能を獲得しようと努力する看護師像は描きにくい。しかし、ハイデガーの時間性／歴史性を考慮することで、エキスパートへの道は、先駆的決意性により投企する存在の仕方に变化する看護師に開かれることになるだろう⁶⁾。

おわりに

ドレイファスの技能獲得段階は、エキスパートを生得的な存在の仕方のようにとらえ、またそれにより、技能獲得段階がエキスパートへと変化する人間存在のプロセスをとらえられず、固定的な人間存在を描いているように見えることを指摘した。そして、ハイデガーの先駆的決意性が、技能獲得段階を技能獲得のプロセスとしてとらえうることを示唆した。今後は、未来の可能性に投企する者の熟慮的対処を超えた配視的対処はどのような構造をした「行為」なのか、それを獲得するにはどのようなアプローチが可能かを検討しなければならない。

注

- 1) 表象を心（あるいは意識）に現前するものとしてとらえ、世界のいっさいを心に取り込んで考えようとするのが表象主義である。表象主義によれば、われわれは外界からの刺激を受け入れ、それに基づいて外界のあり方についての表象を形成し、さらにその表象にもとづいてなすべき行動の表象を形成し、それに従って行動するという図式となる。行動の変容を意図したアプローチを教育とするなら、この図式にのっとった表象主義的な教育は、言語化して説明可能な知識（形式知）や情報を多く提供することになる。なぜなら、行動の変容は、心が受け取った形式知や情報を処理し、行動の表象を形成し、行動を遂行させるので、受け取る形式知や情報の相対量を増やすことでとりうる行動の種類が増える、すなわち行動の変容がおきる可能性が高くなる、という考え方になるからである。反表象主義は、表象主義が世界のいっさいを心や意識で操作対象とみなす点を批判し、心は刺激と行動を通じてだけ外界と交渉するのではなく、外界との絶えざる相互作用のプロセスにあるものととらえる。反表象主義の立場における教育は、身体や感情がかかわるようなケースメソッドやシミュレーション、実習制度を重視する（Dreyfus 2002,57-58）。
- 2) 今回は Dreyfus 2000 から引用したが、1987、2002 の著作でも、それぞれ5段階、7段階の

のを示している。

- 3) 道具が個々に存在しているととらえるのではなく、それぞれの道具は「～のために」という連関によって存在しており、その道具の連関で空間が形成される。医療領域でいうと、医療機器や物品という道具が独立して存在しているのではなく、医療道具は連関の中に存在し、その連関のネットワークによって形成されるのが医療空間である。その道具のネットワークや空間も含む背景をとらえるのが配視である。
- 4) しかし、ドレイファスは熟慮的対処であっても、その空間のなかの道具や他者が非主題的で、かつ自己も非主題的ななかで行われるので、その行動も非熟慮的な対処の一部であるとする。この解釈は、「人間の概念的な認知能力を無視して、原始的で反射的な能力だけを前景に押し出しているかのような疑念を生じさかねない」ものであり、「表象としての行為の知を遮断し、しかもそれ以上行為の知を問わないとすれば、バスケットボールのプレーヤーの目的的行為は、アフリカの大地で獲物を追ってゆく動物たちの目的的行為とさして違わないことになる」（門脇 2010,36）と批判されている。
- 5) ハイデガーによれば、われわれは死に向かう存在であり、死を先取りしたものとして人生をとらえる決意「先駆的決意性」によってわれわれは日常の存在の仕方から脱し、（本来的な）自己を取り戻す。この自己が変わる契機こそが、死の不安を避けるのではなく死を先取りした決意の先駆的決意性であり、それによって人は、日常的な直線的な時間の流れ（過去→現在→未来と一本線上にあるような水平的な流れ）とは異なる時間性としての固有の自己となる。それは、先駆的決意性によって、すでにあった自分のあり方の既在（過去）を、将来の可能性としてある自分のあり方の到来（未来）にめがけて、たち現れる瞬間（今）の存在として、日常の自己から固有の自己となる。過去、未来という実体的な時間があるわけではなく、自分が何であったか（過去）、自分が何であるか（未来）を今（現在）、了解することでしかない。

固有の自己は、自分が何であったかを了解しつつ、新たな可能性をめがけていまの瞬間を生成し、また、状況に投げ出されたという「被投性」を受け、先駆的決意性によって未来の存在の仕方の可能性に向かうこと（「投企」）をする。

そもそもわれわれには、死への不安というのがもっとも根源的な気分の様態としてあり、その不安はいつも、われわれがすでに状況に投げ出されて存在しているという被投性を示すものとしてわれわれを脅かすが、われわれはその不安を紛らわすために、遊びや仕事など目の前の営為に没頭している。この存在の仕方が日常的なわれわれの「世人」である。なお、ハイデガーは世人としてのあり方を否定するものでもなく、むしろ、それがごくわれわれの日常的平均性であることを肯定しており、世人が非本来的なあり方だとして本来的な自己になることを推奨するわけではない。

- 6) ハイデガー哲学が、ハイデガー自身にナチズムへの協力を阻む力をもたなかった理由に、投企する自由のみを有する固有の自己が描かれたことがよく指摘されるが、彼の哲学の独我論的な点は特に留意すべきことである。

引用文献

- Heidegger, R. 1980: 『存在と時間』原佐編、中央公論社（原著 1927）
- Dreyfus, H., & Dreyfus, S. 1987: 『純粹人工知能批判：コンピュータは思考を獲得できるか』アスキー（原著 1986）
- Dreyfus, H., 1992: 『コンピュータには何ができないか—哲学的人工知能批判』産業図書（原著 1992）
- 2000: 『世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学』門脇俊介監訳、榊原哲也／貫茂人／森一郎／轟孝夫訳、産業図書（原著 1990）
- 2002: 『インターネットについて』石原孝二訳、産業図書（原著 2001）
- 石原孝二 2010: 「認知科学における状況論的アプローチとハイデガー：ドレイファスのハイデガー解釈の射程」哲学年報 (49), 17-30
- 門脇俊介 2000: 「アメリカのハイデガー／ドレイファスのハイデガー論」『世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学』門脇俊介監訳、榊原哲也／貫茂人／森一郎／轟孝夫訳、産業図書
- 2010: 『破壊と構築—ハイデガー哲学の二つの位相』、東京大学出版会